

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 村尾誠一

本論文は、後鳥羽院と『新古今集』、二条為世、『新続古今集』、正徹らをめぐり、中世和歌史の本質を追究したものである。まず冒頭の「序章」において、「古典主義」を鍵概念として和歌史における中世の始発期を『新古今集』に見出したうえで、その後、本論を四章計二十節および終章に分かって分析を進める。

第一章「後鳥羽院における新古今和歌集とそれ以後」は、後鳥羽院の歌人論。正治初度百首の催行の背後にすでに勅撰集撰集への意図があったことを推定し、その根拠として『正治和字奏状』という新視点を提案する(第一節)。建仁二年の後鳥羽院の歌風を、時代様式を受け止めた上での急速な成熟という側面から捉え(第二節)、建保期の院に、古歌と戯れるような機知的な詠作法を見出し(第三節)、『後鳥羽院御口伝』の本歌取論を新古今以後の時代背景の中で捉え(第四節)、同書の隠岐述作説を歌壇の権力構造の視点から補強し、かつ宛先として藤原基家を提案し(第五節)、『遠島百首』は宮廷における感情伝達を目指す王朝の文学伝統を志向するものと規定する(第六節)。

第二章「新古今和歌集直後の諸相」は従来軽視されてきた『新古今集』から『新勅撰集』の間の和歌活動を論じる。建保期の定家の和歌に創造性を認め、その背後に和歌の正統性への希求を想定し(第一節)、『土御門院百首』をもとに、表現の時代的流行を主体的に利用する歌人士御門院の方法を跡づけ(第二節)、建保期の手法の特徴を『新古今集』で規範化した表現の再構成に見(第三節)、『新勅撰集』を「実」の集と規定する中世的言説は、「花」よりも「実」を尊ぶ中世的な花実論に基づくものであるとする(第四節)。

第三章「二条為世の時代」は鎌倉時代後期の和歌宗匠二条為世の論。古典世界の再構成という新古今時代を起源とする中世和歌的な「型」のあり方を、為世の作品から抽出し(第一節)、その初期の作品に、古典主義的ながら巧みに差異化を図る方法を認め(第二節)、二条派・京極派に共通の時代的構図があることを指摘する(第三節)。

第四章「勅撰和歌集の終焉期」においては、まず勅撰二十一代集の掉尾を飾る集でありながら本格的研究のなかった『新続古今集』につき、第一節の概括の後、撰者飛鳥井雅世の家の歴史への意識と古典主義の連鎖の方法を読み解き(第二節)、飛鳥井雅親の挫折した勅撰集の試みに対し、勅撰集の担い手の変化をその背景として指摘する(第三節)。同章後半は正徹を扱う。正徹が勅撰集作者となれなかった経緯をたどりつつ、彼の「実」をも捨てない詠歌態度を浮かび上がらせ(第四節)、古典を材料にして実感的世界を表現するその特異な発想(第五節)や「幽玄」と名づけられた新古今的表現の継承点を明らめ(第六節)、現実から乖離し観念化されたと見なされる宮廷文化の流れの中で捉える(第七節)。

終章では、古典主義に新たな要素が加わる形で変質してゆく近世初期和歌史への理解を通して、中世和歌史の終焉を見定める。

本論文は、主要な中世歌人・和歌作品を緻密に読み解くことで、それらの新たな和歌史的意味づけを成し遂げつつ、なおかつそれらを総合して新鮮な中世和歌史の全体像を提示している。取り上げなかった主要作品も少なくなく、それらはさらに今後論じられる必要があるが、本審査委員会では上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士(文学)の学位に十分値するとの結論に至った。